

藤元町西

(柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第99集)

藤元町西

— 新潟県柏崎市 藤元町西遺跡発掘調査報告書 —

2020
(令和2年)

柏崎市教育委員会

柏崎市教育委員会

藤元町西

— 新潟県柏崎市 藤元町西遺跡発掘調査報告書 —

2020
(令和2年)

柏崎市教育委員会

序

柏崎市の中心市街地の東端部に位置する藤元町は、主要な道路である一般国道8号と県道黒部柏崎線に挟まれた場所に位置し、地域の西側にはJR越後線が通っています。交通の便が良いこの地域は、宅地化や商業地化が進んでおり、現在の景観からは地域の歴史を知ることが難しくなっています。

この度、市道改良工事に先立って実施した試掘調査により藤元町地内で2か所の遺跡が見つかり、この地域にも古くから集落が営まれていた証拠を初めて確認することができました。本書は令和元年度（2019年度）に藤元町西遺跡で行った発掘調査の成果をまとめた報告書です。発掘調査を行った範囲が狭いため、建物の配置など集落の詳細を明らかにすることはできませんでしたが、平安時代、鎌倉時代、そして現代の街につながる江戸時代以降の遺構や遺物を確認することができました。平安時代の集落は、溝によって整然と区画されていたようです。その溝は、補修をしながら鎌倉時代まで使われていたことも分かりました。江戸時代のものでは、暮らしの中で使われていた多彩な陶磁器や井戸の崩落を防ぐための大きな桶が出土しました。いずれもこの土地に暮らしていた人々の生活の痕跡であり、従来の文献資料等からだけでは知りえなかった先人たちの生活の一端をうかがい知れる貴重な資料となります。このような成果をまとめた調査報告書を、地域の歴史を知るための一助として用いていただければ幸いです。

最後に、調査に格別なる御協力と御配慮をいただいた地域の皆様、御指導くださった新潟県教育委員会、御協力をいただいた諸機関、発掘調査に携わった皆様や関係者各位に対し、深く感謝申し上げます。

令和2年（2020年）7月

柏崎市教育委員会

教育長 近藤 喜祐

例　　言

1. 本報告書は、新潟県柏崎市藤元町地内に所在する藤元町西遺跡で行われた発掘調査の記録である。
2. 発掘調査は、柏崎市（担当：都市整備部都市整備課）を事業主体とする市道柏崎 11-107 号線ほか 1 路線道路改良舗装工事に伴い、事前調査として実施したものである。
3. 本発掘調査は、柏崎市教育委員会が調査主体となって実施した。
4. 発掘調査における現場作業は令和元年（2019 年）6 月 13 日に着手し、8 月 23 日まで実施した。基礎整理作業を含め整理作業及び報告書作成は令和元年（2019 年）8 月 24 日から令和 2 年（2019 年）3 月 9 日まで実施し、令和 2 年（2020 年）7 月 10 日に本報告書を刊行した。
5. 本事業の発掘調査・基礎整理作業・整理作業・報告書作成は、柏崎市が藤村クレスト株式会社 本社営業部 柏崎営業所に業務委託して実施した。
6. 本事業の整理作業における遺物の洗浄、注記、接合・補強、実測、デジタルトレースは、柏崎市教育委員会 埋蔵文化財事務所において、担当職員を中心に同事務所のスタッフが行った。
7. 本事業の現場作業における写真撮影および土層の分層、注記は丹俊詞、板谷隆弘、春日雅美（藤村クレスト）が行い、平面図と断面図の作成は丹の指示のもと補助員が行った。
8. 本報告書で使用した土層断面の注記内の土色の表記および遺物観察表中の土器等の色調は、農林水産省 農林水産技術会議事務局ならびに一般財團法人日本色彩研究所監修の「新版 標準土色帖」に準拠した。
9. 本報告書で使用した方位は座標北、座標値は世界測地系（測地成果 2011）である。
10. 出土遺物には遺跡名の略号として「フジ元西」と注記し、遺構名・グリッド・層序を併記した。
11. 本報告書の執筆は、第 I 章 1 を中島義人（柏崎市教育委員会）、第 I 章 2、第 II 章を板谷隆弘（藤村クレスト）、第 III 章、第 IV 章を板谷、丹俊詞（藤村クレスト）、第 V 章、第 VI 章を丹が行い、編集は中島の監修のもと丹が行った。
12. 本報告書では遺構の種別ごとに記号を用いて一連番号を付した。
溝=SD、井戸=SE、土坑=SK、ピット・柱穴=P
13. 本事業で出土した遺物ならびに調査や整理業務の過程で作成した図面・記録類は、すべて一括して柏崎市教育委員会が保管・管理している。
14. 図書館等（著作権法第 31 条第 1 項に規定する図書館等をいう。）の利用者は、その調査研究の用に供するため、本報告書の全体について、複製することができる。
15. 発掘調査の準備段階から本報告書作成に至るまで、次の機関から御助力と御理解、ならびに御教示を賜った。ここに記して、厚く御礼を申し上げる。

藤元町内会 新潟県教育委員会（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

目 次

第Ⅰ章 序説	1
1 調査に至る経緯	1
2 発掘調査の経過	1
3 調査体制	2
第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境	3
1 遺跡の位置と地理的環境	3
1) 柏崎平野の概観／3 2) 鮎石川流域と藤元町西遺跡周辺の地形／3	
2 遺跡周辺の歴史的環境	4
1) 柏崎平野の歴史的環境／4 2) 鮎石川流域の古代から近代の遺跡／6	
第Ⅲ章 調査概要	8
1 調査の目的とグリッドの設定	8
2 基本層序	8
3 調査の方法	8
1) 表土掘削／8 2) 遺構検出／8	
3) 遺構発掘／9 4) 写真撮影／9	
4 整理作業・報告書作成	9
1) 基礎整理／9 2) 整理作業・報告書作成／9	
第Ⅳ章 遺構	10
1 遺構の概要と記述方法	10
2 遺構各説	10
1) ピット・柱穴 (P)／10 2) 土坑 (SK)／10	
3) 溝 (SD)／11 4) 井戸 (SE)／11	
第Ⅴ章 遺物	12
1 遺物の概要と記述方法	12
2 遺物各説	12
1) 古代／12 2) 中世／12 3) 近世／13	
第VI章 まとめ	14
1 調査成果	14
2 おわりに	14
《引用・参考文献》	15
《附 表》	17
《報告書抄録》	卷末

図版目次

[挿図・表]

第1図 藤元町西遺跡の位置と柏崎の地形	4
第2図 藤元町西遺跡と周辺の遺跡分布図	7
第3図 調査区グリッド設定図	8
第4図 土層柱状図	9
表1 藤元町西遺跡発掘調査の体制	2

[図面図版]

図版 1 位置図
図版 2 全体図
図版 3 分割図 1
図版 4 分割図 2
図版 5 調査区東壁断面図
図版 6 遺構個別図 1
図版 7 遺構個別図 2
図版 8 遺構個別図 3
図版 9 出土遺物 1
図版 10 出土遺物 2
図版 11 出土遺物 3

[写真図版]

図版 12 調査区
図版 13 遺構 1
図版 14 遺構 2
図版 15 遺構 3
図版 16 遺構 4
図版 17 遺構 5
図版 18 出土遺物 1
図版 19 出土遺物 2
図版 20 出土遺物 3

I 序 説

1 調査に至る経緯

柏崎市藤元町は、柏崎市の中心市街地から北東へ約 2.5km に位置し、主要な道路である一般国道 8 号と一般県道黒部柏崎線に挟まれている。地区的南側は住宅街と商業施設が広がり、工場も立ち並んでいる。調査の対象となった市道柏崎 11-107 号線は、この藤元町地区の西側を南北に通る路線で、周辺の住宅街から市立横原小学校や市立瑞穂中学校へ通う児童生徒の通学路として使われ、とうぶ保育園への送迎で往来する親子連れも多い。当該路線と交わる市道柏崎 11-9 号線と合わせて歩道が未整備であったため、路線の拡幅と合わせた歩道整備が望まれていた。これら路線の道路改良の計画がなされ、事業担当課と埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて協議がなされたが、これまで藤元町地内で把握された遺跡は存在しなかった。これは、鰐石川河口付近に広がる砂丘後背地で湿地性が高いことから遺跡が存在する可能性が低いと考えられてきたことにもよる。しかし、国道 8 号バイパス工事に伴い宝田遺跡や山崎遺跡が見つかり遺跡の分布が確認されたことや、藤元町地内で中世以前の遺物が採取されたことから事前に試掘調査を行うこととなった。平成 25 年（2013 年）に 11-9 号線を対象とした試掘調査で藤元町遺跡が発見された〔柏崎市教育委員会 2016〕。事業対象地は遺跡の縁辺にあたると想定されたことや、工事が歩道整備であり包含層や遺構を損傷するものでなかったことから、取扱いは工事立ち合いとなつた。その後、事業が進捗して市道柏崎 11-107 号線の取扱いについて協議が開始された。用地買収が完了した平成 30 年（2018 年）に試掘調査を実施したところ、土坑や溝、ピットを検出し、中世の遺物も出土したことから、当該範囲を新発見の藤元町西遺跡として新潟県教育委員会へ報告した〔柏崎市教育委員会 2019〕。その後、事業担当課と遺跡の取扱いについて協議したが、前述のとおり道路改良が望まれている路線であることから、車道を拡幅する範囲を中心に記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。

調査を開始するにあたって、柏崎市教育長は令和元年（2019 年）6 月 3 日付け博第 526 号で新潟県教育長へ埋蔵文化財発掘調査の報告を行つた。調査予定面積は約 400 m² とし、令和元年（2019 年）6 月 14 日に着手し、同年 7 月 29 日まで発掘作業を行つた。調査の終了報告は令和元年（2019 年）8 月 2 日付け博第 547 号で行つた。

2 発掘調査の経過

令和元年（2019 年）5 月 30 日に柏崎市と藤村クレスト株式会社本社営業部柏崎営業所が藤元町西遺跡発掘調査支援業務委託契約を締結した。同日に工程等の打ち合わせを両者で行い、翌 31 日から事前準備を行つた。6 月 4 日に境界杭の復旧を行つた。JR 越後線が道路を挟んで調査区に隣接しているため、5 日に東日本旅客鉄道株式会社（以下、「JR 東日本」）、柏崎市教育委員会及び藤村クレスト株式会社で立ち合いを行い、協議や書類等は不要であることを確認した。6 日から町内会長及び近隣住民へ挨拶と調査の説明を行つた。10 日には調査区東側の休耕地、調査区から線路を挟んで西側のプレハブ設

置場所及び駐車場の地権者に挨拶を行い、それらの借地の了承を得た。現場の準備作業を6月11日から開始し、6月14日に調査に着手した。調査前の6月11日に調査区の設定及び現況写真の撮影を行った。表土掘削は19日に終了し、24日から作業員による調査作業を開始した。作業はA区の開渠掘削や遺構検出などから開始し、7月8日からB区の調査に着手した。全体の遺構調査が完了し、7月25日に空中写真撮影を行い、29日に測量作業などの全調査が完了した。同日から器材等の撤収を開始し、8月6日から9日にかけて調査区を埋め戻し、立ち入り禁止の措置を行った。8月19日から現場事務所やそれに係る器材等の撤去を行い、23日に現場業務を完全に終了した。

基礎整理作業は発掘業務と並行して現場事務所にて図面整理、写真整理などを行った。出土遺物の洗浄から注記、接合、実測、デジタルトレースは柏崎市教育委員会埋蔵文化財事務所で担当職員を中心に同事務所のスタッフが行った。図面・写真図版の作成及び編集、遺構観察表の作成、報告書原稿の執筆等を藤村クリエスト株式会社埋蔵文化財調査部が同社整理室で行った。

3 調査体制

令和元年度(2019年度)の現場作業から基礎整理作業、整理作業、報告書作成を経て、令和2年度(2020年度)の報告書刊行に至るまでの調査体制は次の通りである。

表1 発掘調査の体制

調査主体	柏崎市教育委員会 教育長 近藤 喜祐
所管	柏崎市教育委員会 博物館（担当：埋蔵文化財係）
総括	近藤 拓郎（教育部長） 小黒 利明（博物館長）
監理	小池 久明（館長代理兼埋蔵文化財係長）（～令和2年3月31日） 中村 克昭（埋蔵文化財係長）（令和2年4月1日～）
庶務	高野 智佳（非常勤職員）
監督員・調査担当	中島 義人（主任・学芸員）
調査補助員	池田 朝子・白井 かおり・池田 文江・加藤 章恵 白川 智恵・徳間 香代子・山岸 サチ子（非常勤職員）
調査組織	藤村クリエスト株式会社 本社営業部 柏崎営業所（担当：埋蔵文化財調査部）
調査員	丹 俊司（調査係長）
土木一般世話役	丸山 喜
土木作業管理者	
補助員	板谷 隆弘、春日 雅美（調査員）

II 遺跡をとりまく環境

1 遺跡の位置と地理的環境

1) 柏崎平野の概観

柏崎市は、新潟県のはば中央に位置する人口約8万3千人（令和元年（2019年）10月）ほどの地方都市で、地域区分では中越に属している。一般的に中越地方と呼ばれる地域は、魚沼郡域となる信濃川上流域や魚野川流域一帯を占める南部と、長岡市などが所在する信濃川中流域から柏崎平野にかけての北部に大別することが可能である。柏崎平野は、中越地方の北部でも西半部に位置することになる。柏崎平野には、柏崎市と刈羽郡刈羽村があり、柏崎平野の大半を柏崎市が占めている。

柏崎平野は、二大主要河川である鯖石川と鶴川により形成された幅約7km、長さ約18kmの臨海沖積平野であり、各河川は個々に独立した水系を持っている。信濃川水系により形成された越後平野や、関川水系により形成された頭城平野とは丘陵や山塊による分水嶺によって隔てられており、一つの独立した平野を形成している。また、刈羽村を含めた柏崎市北部を縱断する別山川は最終的に鯖石川に合流するが、約17kmの間で独自の水系を形成していると捉えることができる。

柏崎平野を取り巻く丘陵や山塊は東頭城丘陵の一部である。柏崎平野一帯の丘陵地形は、北流する鶴川・鯖石川によって西部・中央部・東部に3分され、それぞれ米山・黒姫山・八石山の刈羽三山を頂点とする。東部は北東方向の背斜軸に沿って、西山丘陵・曾地丘陵・八石山丘陵が北から規則的に並び、向斜軸に沿つて別山川・長島川といった鯖石川の支流が南西に流れ出る。中央部は黒姫山を頂点に北へ緩やかに高度を下げ、沖積地に接する一帯は広い中位段丘を形成するとともに、その北側には湿地性の強い冲積地が広がっている。西部は米山を頂点とした傾斜の強い山塊であり、現在も隆起を続いているとされている。これら山塊・丘陵地形の広がりは海岸まで達し、米山海岸と称される国定公園の景勝地を形成する。米山海岸の沿岸部では、低位・中位・高位の各段丘による断崖が顕著で冲積地は少なく、海辺は漂石海岸で砂浜もほとんど見られないことが特徴となっている。

また、柏崎市の中央部に広がる沖積平野は、その北西正面部を日本海に洗われ、海岸に沿って荒浜・柏崎砂丘が横たわっており、現在では柏崎の市街地がこれを覆っている。この砂丘後背地の沖積地は湿地性が強く、鶴川・鯖石川の蛇行により各所に幾筋もの自然堤防が形成されている。

2 鯖石川流域と藤元町西遺跡周辺の地形

藤元町西遺跡は、海岸線から東に約1.3kmの鯖石川左岸に位置する。鯖石川上流部は地すべり地帯が多く侵食・運搬作用が盛んだが、下流では灌漑用の取水施設が多いため流れが緩やかになる。そのため天井川が形成されやすく、平野や遺跡の形成に大きな影響をもたらしている。柏崎平野の沖積面は上下の二面に区分され、上位の面は柏崎面、下位の面は鯖石川面と呼ばれている。柏崎面が完成された後も河川の下刻は続き、完成了した柏崎面を侵食している。平野部では洪水の際の蛇行により側方侵食が行われ、中流から下流にかけて柏崎面を破壊し、新たに鯖石川面を作り出している。この鯖石川面は鯖石川流域の幅1kmの狭い範囲にのみ分布する面であるが、この面により鯖石川流域の氾濫原が形成され、両岸の自然堤防にはいくつかの古代及び



第1図 藤元町西遺跡の位置と柏崎の地形

中世の遺跡が立地している。

さらに、鯖石川の蛇行に拍車をかけているものに荒浜砂丘の荒浜砂丘砂層II（新砂丘）が挙げられる。荒浜砂丘砂層IIは平安時代以降に西山丘陵の南側、鯖石川右岸に大規模な砂丘を作り出し、土砂崩れをしばしば起こして河道の蛇行をさらに進めた。鯖石川と別山川の合流部付近には荒浜砂丘により形成された丘があるが、砂丘が土壤化しているため右岸の破堤は少ない。しかし、左岸には鯖石川と荒浜・柏崎両砂丘により形成された後背湿地が広がり、また両河川の合流部であることから水が集中し、洪水により破堤するため河道がしばしば替えられていた。このため近辺の遺跡は、河川の氾濫の影響を受けていた可能性がある。

2 遺跡周辺の歴史的環境

1) 柏崎平野の歴史的環境

越後国を含む古代北陸道の諸国は、それまでの越国が分割されて成立したもので、それは690（持統4）年の庚寅年籍作成段階であった可能性が高いとされている〔坂井1983〕。成立当初の越後国の領域は阿賀野川以北であり、柏崎平野はその時期には越中国に含まれていたとみられている。現在のような越後国の国域は、702（大宝2）年に越中国内の頸城郡・古志郡・魚沼郡・蒲原郡の4郡が越後国に編入され、712（和銅5）年に出羽国が分離・立国して確定されることとなった。佐渡国は越国から分離した後、743（天平15）年に越後国にいったんは併合されたが、752（天平勝宝4）年に再び分離・立国し、以後、明治時代まで越後国と佐渡国が並立することになる〔米沢1980〕。

柏崎・刈羽地域は、律令初期に国都制が成立した当初から平安初期まで6郡の行政区画のうちの「古志郡」に含まれていた。古志郡の範囲は広く、現在の柏崎市・刈羽村・長岡市・見附市の南部に至る。9世紀前半に古志郡から三嶋郡が分立し、その後の郡域が確定された。931～938（承平元～8）年に成立した『倭妙類聚抄（和妙抄）』には、三嶋郡の郷として「三嶋」・「高家」・「多岐」の3郷が記されており、三嶋郷が鶴川流域、高家

郷が鯖石川・長島川流域、多岐郷が別山川流域であると推測されている〔金子 1990〕。

927（延長 5）年に完成した『延喜式』に記された、北陸道の駅家のうち「三嶋」と「多太」が三嶋郡に存在したものと考えられる。鶴川下流域の箕輪遺跡では、「上殿」と記された墨書き器や、「駅家村」と記された木簡や黒色漆塗りの鏡などが出土しており、近隣に三嶋郡衙や三嶋駅が存在した可能性が指摘されている〔新潟県教委ほか 2015〕。多太駅については多多神社の名称から、現在の吉井地区・曾地地区にあったと考えられてきた。しかし、別山川上・中流域で古代の遺跡が数多く確認されていることや、三嶋駅・多太駅及び大家駅の比定地のそれぞれの距離を考慮すると、現在の推定地よりもやや上流についても検討する必要があると考えられる。三嶋駅と大家駅の中間地点には、三嶋郡内の式内社の一つである物部神社に比定されている二田物部神社（柏崎市西山町二田）が存在し、そこから南西に古墳時代から中世にかけての遺跡が集中している等のことから、この周辺に多太駅があった可能性がある。

11世紀後半～12世紀になると、越後国にも多くの莊園・公領が成立するようになる。『吾妻鏡』の1186（文治 2）年3月12日の条「三箇國庄々未進注文」には、「鶴（宇）河莊」・「佐橋莊」・「比角莊」が記され、これらは11世紀～12世紀中葉頃に寄進地系莊園として成立したと考えられる〔荻野 1986〕。これらの莊域は明確ではないが、「鶴河莊」は鶴川流域と鯖石川の安田から下流の左岸域が相当すると推定されている。「佐橋莊」は、その莊名から鯖石川との関りが強いことが明らかで、長島条という地名が史料に残されており、鯖石川中流域と長島川流域と考えられる。「比角莊」は、鶴川下流右岸域から鯖石川下流域左岸域に広がっていたとされるが、1364（貞治 3）年以降の史料では確認されず、他の勢力による莊園侵略がなされたと考えられている。私領だけでなく、公領（保）も存在した。別山川流域や北東の海岸部には中世の莊園ではなく、中世後期から江戸時代の史料では「赤田保」・「原田保」・「野崎保」・「埴生保」・「吉井保」・「武町保」・「神田保」があつたことが史料に残されており、国衙領としての伝統が強く残存していた可能性が高い。その場合、『明月記』1199（正治元）年9月22日の条、1313（正和 2）年の『源光広和与状写』に記載されているとおり、中世前期では莊園は成立せず「荊羽郷」と称されていたと考えられる〔柏崎市教委 2012〕。中世後期における柏崎平野の在地の勢力には、佐橋莊と鶴川莊安田条を本拠とした越後毛利氏、鶴川莊上条の上条城を館とした上条上杉氏、刈羽の赤田城を根拠地として別山川流域の大半を領する斎藤氏などがみられる。御館の乱（1578～1579年）では、安田毛利氏、斎藤氏、上条上杉氏が景勝方に味方し、北条毛利氏は景虎方の主勢力として活躍した。しかし北条毛利氏は、景勝が優勢に転じて北条城が落城すると景勝方へ降り、佐橋莊を主とする領地のすべてが上杉景勝の武将に細分して分け与えられた。

当地域では中世末まで上杉氏による統治が続いたが、1598（慶長 3）年、豊臣秀吉により上杉景勝が会津に移封された後、石田三成の領地となつた。その後、堀秀治が治め、幕藩体制成立後は春日山藩となつた。1606（慶長 11）年に堀秀治の後を継いだ堀忠俊は、春日山城を廃城し福島城に入り、1606（慶長 11）年～1614（慶長 19）年は福島藩となり、堀忠俊と松平忠輝が4年ずつ藩主を務めた。松平忠輝は1614（慶長 19）年に福島から高田に城を移したが、1616（元和 2）年に領地を没収されたため、わずか2年間の在城となつた。同年に松平忠輝の改易により、旧高田藩は高田藩・長峰藩・藤井藩・長岡藩・三条藩に分立した。藤井藩は、1616（元和 2）年に福島平右衛門重綱が上野国伊勢崎より移封されることにより立藩した。鯖石川中流域の平野部で初めて城郭と城下町建設が試みられたが、1620（元和 6）年に福垣氏が三条へ移封されて藤井城は廃城となり、18世紀前半までは1616（元和 2）年～1685（貞享 2）年の天領時代を除き、高田藩による支配が続いた。その後、1741（寛保元）年～1823（文政 6）年までは白河藩に、1823（文政 6）年～幕末までは桑名藩に属した〔新沢 1990〕。

2) 鮫石川流域の古代から近世の遺跡

古代 自然堤防上や沖積地に集落遺跡、丘陵斜面地に製鉄関連遺跡が分布する。本遺跡周辺の遺跡としては角田遺跡（8）・上原遺跡（9）・開運橋遺跡（12）・藤元町遺跡（13）・桜木町遺跡（16）がある。藤元町遺跡は本遺跡の北東に近接している。2013（平成25）年に試掘調査が行われ、ピット1基、溝1条を検出し、平安時代の土師器の椀と甕、須恵器の甕などが出土している〔柏崎市教委2016〕。本遺跡の基本層序と類似しており、その立地からも両遺跡の関連性が想定される。角田遺跡は古墳時代から近世までの遺物や遺構が確認され、古くから鮫石川の自然堤防上を集落として利用していたことが窺える〔柏崎市教委1999、2017〕。上原遺跡は古墳時代から江戸時代中期までの遺構や遺物が確認されており、I～VII期に時期区分がされている。古代においては9世紀前半の集落が存在したと考えられており、溝で囲まれた掘立柱建物や廃棄土坑などが確認されている。それ以降12世紀まで集落の痕跡は確認されていない〔柏崎市教委2015〕。開運橋遺跡は1955（昭和30）年の鮫石川河川改修の際に、標高0m以下の川底より8世紀後半～9世紀前半頃に比定される須恵器の杯などが出土している〔柏崎市史編さん委1987〕。桜木町遺跡は本遺跡から西に約500mの位置に所在する遺跡で、平安時代の土師器や中世の土師質土器が表採されている〔柏崎市教委1996、2014〕。2012（平成24）年の調査では明確な遺構は確認されておらず、近世の陶磁器などが表採や試掘調査で確認されている〔柏崎市教委2014〕。

中世 本遺跡周辺には上原遺跡・東原町遺跡（11）・柏崎町遺跡（17）・宝田遺跡（18）・山崎遺跡（19）・丘江遺跡（20）・田塚山遺跡群（21）・小児石遺跡（22）がある。山崎遺跡は41棟の掘立柱建物を確認している。12世紀後半～16世紀後半の土器や輸入品を含めた陶磁器が出土しており、建物の規模や出土遺物から、中世の柏崎港と関連し、有力武士が存在した集落遺跡である可能性が考えられる〔新潟県教委ほか2018〕。丘江遺跡は13世紀～15世紀を主体とする集落遺跡であり、これまでに99棟の掘立柱建物や水田遺構が確認され、井戸から舌長鎧や五輪塔などが出土している〔新潟県教委ほか2018〕。宝田遺跡は層位的に検出された遺構や遺物を整理することにより、5期に時期区分がされている。最上層の遺構は近世のものとされ、その当時に構築された水田施設は現代にまで引き継がれると考えられている。また、宝田遺跡と山崎遺跡や丘江遺跡は時期的な共通点があり、扇状地という地形的な連続性もあることから、関連性があると考えられている〔新潟県教委2018〕。東原町遺跡は13世紀後半～14世紀が主体の集落遺跡である。掘立柱建物や井戸、溝などを確認し、溝によって居住域と生産域が区画されている様子が明らかとなった。居住域では鍛冶関連工房や土師質土器が一括廃棄された遺構などがあり、1万枚以上の錢貨が埋納された珠洲の壺が出土している。近接する角田遺跡と共に、周辺集落の中心的な役割を果たしたと考えられる〔新潟県教委ほか2005〕。荒浜砂丘上の柏崎町遺跡では、15世紀後半～17世紀後半に比定される17棟の掘立柱建物が復元されており、15世紀以降の青磁、白磁、珠洲や瀬戸美濃などが多数出土しており、15世紀から現代まで断続的に集落が営まれていることが確認された〔柏崎市教委2001〕。上原遺跡は、中世前半に比定される掘立柱建物が6棟確認された。12世紀後半～14世紀初頭にかけて集落が営まれ、14世紀以降になると集落の痕跡は途絶え、墓地として利用されていたと考えられ、中世後半の土坑墓が確認されている〔柏崎市教委2015〕。田塚山遺跡群では12世紀後半～13世紀前半に造営された仏堂や墳墓が検出されている。出土遺物は、土師質土器や墳墓から出土した刀子などがあるが、仏具は出土していない〔柏崎市教委1996〕。小児石遺跡は、13世紀～16世紀にかけて墳墓が造営されていた墓地であり、石塔や墨書きが出土している。確認された墳墓は、地表面に埋葬され盛土が行われた墳丘墓と、地中に埋葬された土坑墓の2つに大別される。前者は後者に先行すると考えられ、小児石遺跡の墳墓は大きく3期に区分されている〔柏崎市教委1991〕。

近世 本遺跡周辺には、下境井遺跡（6）・角田遺跡・上原遺跡・東原町遺跡・春日陣屋跡（15）・藤井城跡（23）がある。角田遺跡では当期の戸戸が6基確認されており、17世紀前半の伊万里や唐津が出土している。中世前期に栄えた集落が一旦廃絶し、17世紀に4度目となる集落が営まれたと考えられている〔柏崎市教委1999〕。上原遺跡では角田遺跡と同様に、17世紀後半に再び集落が営まれたと考えられている〔柏崎市教委2015〕。下境井遺跡では弥生時代から近世までの遺物・遺構が確認されているが、その大半が近世のものであり、17世紀後半～18世紀前半における集落の成立が考えられている。掘立柱建物が3棟確認されており、17世紀後半～19世紀前半に比定される肥前や瀬戸内美濃などの陶磁器が出土している〔柏崎市教委2013〕。東原町遺跡では、戸戸や土坑などが検出され、土坑からは錢貨や棺として使われた桶が出土しており、18世紀以降のものと考えられている〔新潟県教委ほか2005〕。藤井城跡は藤井藩の平城である。存続期間は1616（元和2）年から1620（元和6）年の短期間である。史料がないため、築城計画や城下町建設の進捗状況は不明とされる。発掘調査では、藤井城に直接関係する遺構は検出されていないが、廢城後とされる17世紀後半から18世紀後半の土坑や溝などの遺構や、陶磁器などの出土遺物が確認されている〔柏崎市教委2000〕。春日陣屋跡は、本遺跡に接する旗本知行地の役宅である。陣屋跡周辺と土壙状遺構から、17世紀後半～19世紀前半に比定される肥前の陶磁器が採集されている〔柏崎市教委2011〕。



No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期
1	田尻小学校B	古代	10	御下川原	古墳・古代・中世	20	丘江	弥生・中世	28	吉井水上I	古代
2	田尻小学校A	古代	11	東原町	古代・中世・近世	21	田嶋山遺跡群	縄文・弥生・古墳	29	吉井水上II	古墳・平安・中世
3	沙津山	平安・中世	12	御連横	縄文・弥生・古墳	22	児子石	中世(墓地)	30	戸口	弥生・古墳・古代
4	西岩野	弥生・古墳・中世	13	藤元町	平安	23	藤井城跡	古代・中世・近世	31	蓑場	弥生・古墳・古代
5	宮ノ瀬	古代・中世	14	藤元町西	古代・中世・近世	24	岡野	縄文・古墳・中世	32	札場	古墳・平安・中世
6	下境井	古墳・平安	15	春日陣屋跡	古墳	25	江ノ下	弥生・古墳・平安	33	行原	古墳・平安・中世
7	下境井西	古代	16	木野町	平安	26	西草薙	平安・近世	34	吉井行原古墳	古墳
8	角田	古墳・近世	17	船崎町	中世・近世	27	稚田町	縄文・古墳・平安	35	杉ノ木田B	古代・中世
9	上原	古墳・平安・鎌倉	18	室田	古代・中世	28	室町	平安・中世			
			19	山崎	平安・中世						

第2図 藤元町西遺跡と周辺の遺跡分布図

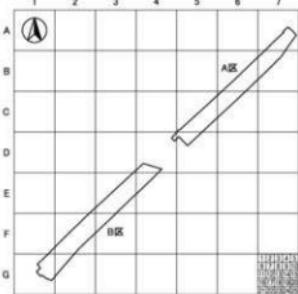
III 調査概要

1 調査の目的とグリッドの設定

今回の調査は、市道柏崎 11-107 号線ほか 1 路線道路改良舗装工事に伴う調査で、工事により失われる範囲において記録保存することを目的とした発掘調査である。調査区は北東から南西にかけて幅約 4.5m、長さ約 85m で設定し、面積は約 320 m² となった。

調査区が農道で区切られており、その北東側を A 区、南西側を B 区とした。グリッドは大小 2 種類を用いた(第 3 図)。大グリッドは、北西隅を基準とする 10m 方眼を 1 グリッドとし、南北方向にアルファベット、東西方向には算用数字をあてた。小グリッドは、大グリッドを 2m 方眼で 25 等分したもので、北西隅を 1、南東隅を 25 とした。大小のグリッドを組み合わせて「3E15」などと表した。

なお、座標値は世界測地系(測地成果 2011)を使用し、測量に必要な基準杭を 2 カ所に設置した。



第 3 図 調査区グリッド設定図 (1 : 1200)

2 基本層序

基本土層は各調査区の東壁で観察し、土層断面図(図版 5)とそれをもとにした柱状図(第 4 図)を作成した。堆積土は基盤層(IV 層)を含め 6 層で構成される。I 層は現代の畑の耕作土層である。II 層と III 層はそれぞれ 2 層に細分することができる。II a 層は近世の遺構検出面、II b 層は II a 層と III 層の漸移層で中世の包含層、III a 層は中世の検出面であり、古代の包含層と考えられる。III b 層は古代の検出面であり、IV 層は基盤層である。

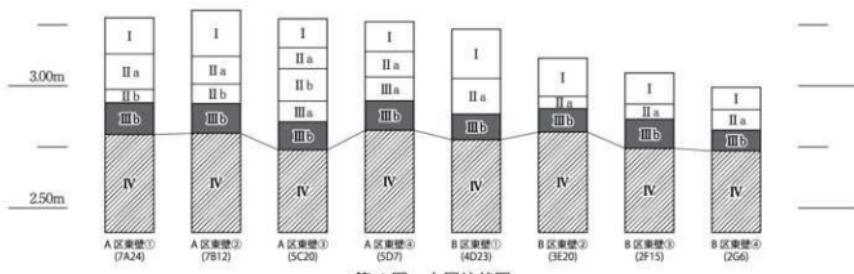
3 調査の方法

1) 表土掘削

調査区は遺構検出面まで約 0.5 m の厚みで現代の耕作土等が堆積しており、作業の効率化を図るために、パケット容量 0.25 m³ のバックホウ 2 台を用いて掘削を行った。バックホウによる掘削は調査員の指示のもとに行なった。遺物が出土した場合は適時、グリッドごとに取り上げ、遺構検出面である IV 層上面まで掘削を行った。表土掘削が終了した部分からブルーシートで覆い保護をした。

2) 遺構検出

遺構検出は基盤層である IV 層上面で行った。作業は A 区から開始し、遺構検出が終了した部分から検出状況の写真撮影を行い、遺構の略測分布図を作成した。遺構検出後はブルーシートで覆い保護をした。



第4図 土層柱状図

3) 遺構発掘

遺構は半蔵して覆土の状況を観察した。全ての遺構において覆土の堆積状況の写真撮影を行い、遺構カードに略図及び土層等を記入した後に完掘し、写真撮影を行った。半蔵方向は基本的に長軸方向としたが、柱痕や遺物を伴う場合は、埋設状況を最も有効に記録できる方向とした。断面図や断面図計測ポイントなどの測量は、トータルステーションと CAD を用いて、調査員の指示のもと補助員が手実測で記録した。平面図や断面図計測ポイントなどの測量は、トータルステーションと CAD を用いて、調査員の指示のもと補助員が行つた。

4) 写真撮影

現場業務においての写真撮影は、調査員により手持ちや三脚を使用して行った。さらにラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行つた。調査員による撮影は、カラーリバーサル 35 mm フィルムとデジタル一眼レフカメラを用いた。また、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影では、カラーリバーサル 6 × 6 cm 判フィルム、白黒 6 × 6 cm 判フィルム、デジタル一眼レフカメラを用いた。

4 整理作業・報告書作成

1) 基礎整理

出土遺物の洗浄、注記、接合・補強、図面や遺構カードの整理、写真整理、遺構観察表、各種台帳類の作成等を行つた。作業は現場業務中から開始し、荒天時など外作業ができない時に作業を進めた。遺物の注記は、遺跡名を「フジ元西」と表記し、グリッドや遺構、層位といった位置情報を記入した。図面や写真は番号・撮影タイトル等を付けてケースやアルバム、外付け HDD に収納し、併せて台帳を作成した。

なお、遺物の洗浄、注記、接合・実測・トレースは、柏崎市教育委員会埋蔵文化財事務所の担当職員が行つた。

2) 整理作業・報告書作成

整理作業および報告書作成は、藤村クレスト株式会社が基礎整理作業の終了後に引き続き、同社の埋蔵文化財調査部の整理室で令和 2 年（2020 年）3 月 9 日まで作業を行つた。作業内容は、遺構断面図のデジタルトレース、遺物写真撮影、遺構・遺物の図面図版作成と写真図版作成、遺物の観察及び観察表作成、遺構観察表作成、原稿執筆、挿図表作成、報告書編集・校正などである。

IV 遺構

1 遺構の概要と記述方法

藤元町西遺跡で確認した遺構の総数は116基で、内訳はピット88基、溝5条、土坑21基、井戸2基である。遺構はすべてIV層上面で検出しており、出土遺物から古代から近世のものと考えられる。遺構の覆土は堆積状況により褐灰色土、黒褐色土、にぶい橙色土の3種類に大きく分けられる。

遺構の種別の表記については例言で述べたとおりである。遺構番号は、現地調査で遺構種別に関係なく連続した番号を付けており、その後の検討で遺構ではないと判断したものについては欠番とした。

本文及び遺構観察表の記載は、和泉A遺跡〔新潟県教委1999〕の分類に準拠して平面・断面形態の表記を行った。なお、ピットについては柱痕を伴うものを柱穴、伴わないものをピットと称して観察表に掲載した。また、遺構の詳細や属性については遺構観察表（附表1）を参照されたい。

2 遺構各説

1) ピット・柱穴 (P)

ピットを88基確認した。このうち14基(P13・34・42・43・73・74・77・78・95・113・115・118・120・144)は柱痕を確認したため、柱穴とした。柱痕の規模は10~20cm前後であり、最大のものはP77で25cmである。ピット・柱穴の規模は、直径12~65cm、深さ4~61cmで、平面形の割合は円形が8割、梢円形が2割である。断面形は半円形と台形状が大半を占め、次いでU字状、漏斗状が多い。P13からは直径24cmの柱と考えられる木製品が出土しているが、全体的に朽ちており加工等の痕跡は確認できなかった。P65、P112、P118では灰白色粘質土が堆積していた。これは基盤層であるIV層の粘質土と考えられるが、灰白色に変色したもので、柱の根固めに使用されたものと考えられる。P118は柱痕を確認できた。

P26、14、30、23、32、37、33、35が南から直線的に等間隔に並んで確認できたもので、柵列と考えられたが、8基とも覆土が褐灰色~灰色で、その周囲に鉄分が多く含んでいると考えられる黄橙色に変色した土が見られた。また、柱痕と考えられる部分に砂が多く含まれていることから、稲を干す「はさ掛け」のための木材の痕跡ではないかと考えられ、近現代のものである。

P41の床面から須恵器の無台杯(1)、P89の2層から須恵器の椀(2)と1層から珠洲の壺(3)、P120から唐津の碗(4)が出土した。その他に破片で詳細は不明であるが、須恵器、土師器、珠洲、陶磁器等が出土している。

2) 土坑 (SK)

土坑を21基確認した。柱穴を除いて、長軸が60cmを超えるものを土坑とした。土坑の規模は、直径0.62~2.14m、深さ0.04~0.72mである。遺構の平面形の割合は梢円形が5割、円形が3割、1基の隅丸長方形(SK104)を含め隅丸方形が2割である。断面形は台形状が5割、弧状が3割、半円形が2割である。SK114の平面形は、長径0.87m、短径0.63mの梢円形で、深さは0.5mで断面形は台形状である。

遺構の底から約10cmの厚みで柱穴と同様の灰白色粘質土の堆積を確認した。そのため、柱穴の可能性があるが建物等の構成を確認できず、規模が大きいことから土坑とした。SK17、SK20、SK21、SK22の4基は重複しており、覆土の断面観察により、新旧関係はSK22<SK17<SK20、SK21となることを確認した。SK20とSK21は重複しておらず遺物も出土していないため、新旧関係は不明であるが、比較的新しいものと考えられる。

SK10の床面付近から土師器の鍋(5)、SK106の1層から須恵器の甕(7)、SK99の1層からは珠洲の壺(6)、SK119の1層から珠洲の甕(8)、SK128の3層から土師質土器(9)が出土した。その他に破片で詳細は不明であるが、須恵器、土師器、珠洲、陶磁器等が出土している。

3) 溝 (SD)

溝を5条(SD1、28、46、55、125)確認した。SD28は東西方向、その他の4条は南北方向に延びている。SD55とSD125がほぼ平行しており、SD1とSD28がほぼ直交している。断面観察からSD1とSD28は、掘り直していることを確認した。さらに、底面付近の掘り直し前に相当する覆土が類似していること、IIIa層から掘り直されていることや覆土から出土した遺物の時期が同じであることから、SD1とSD28は同時期に造られ、掘り直しを行ったと考える。

SD1 5C～5Dグリッドに位置する。N-29°-Eに指向し、幅1.58m、深さ0.33m、断面形は台形状である。6、7層をやや垂直に断ち切るように1～5層が堆積しており、調査区南壁の断面観察でもIIIa層から掘り直していることを確認した。上層から珠洲の甕(10、11)、土師器の破片が出土した。

SD28 6B～6Cグリッドに位置する。E-18°-Sに指向し、幅1.85m、深さ0.33m、断面形は台形状である。調査区東壁の断面観察からIIIa層から掘り直していることを確認した。下層から須恵器の有台杯(12)、上層から珠洲の甕(13)、土師器の小破片が出土した。

SD46 7A～7Bグリッドに位置する。N-25°-Eに指向し、幅0.48m、深さ0.1m、断面形は弧状である。断面観察によりSD46の後にP47が掘り込まれていることが確認できた。遺物は出土していない。

SD55 1F～2Gグリッドに位置する。N-10°-Eに指向し、西側の長軸方向の半分が搅乱を受けているため西側の立ち上がりは不明であるが、残存部で幅2.1m、深さ0.74m、断面形は台形状である。下層付近の3層から珠洲の甕(14)、陶磁器、土師器、土錘の破片が出土した。

SD125 3Eグリッドに位置する。N-16°-Eに指向し、幅1.3m、深さ0.2m、断面形は弧状である。遺物は出土していない。

4) 井戸 (SE)

SE2 5D1グリッドに位置する。深さがあること、湧水が認められること、覆土の堆積状況等から素掘りの井戸とした。規模は直径1.03m、深さ1.19mで、平面形は円形、断面形は階段状である。上層から珠洲の甕(15)が出土している。

SE130 3E15グリッドに位置する。規模は直径1.18m、深さ1.56mで平面形は円形、断面形は台形状である。検出面から0.9mの深さで井戸側(16～31)を確認した。縦方向に16枚の短冊形の細長い板材を円筒状に並べ、板材上部の側面に1～2か所を木釘で留め、さらに外側を竹籠で締められたものである。確認できた井戸側は1段でやや傾いているが、内外に傾斜をつけずほぼ垂直に置かれていたと考えられ、底板や蓋板は伴わない。よって、土砂の崩落を防ぐために作られた結桶と考えられる。井戸側の他に陶磁器の小片が出土している。

V 遺 物

1 遺物の概要と記述方法

藤元町西遺跡から出土した遺物の総量は、破片数で約463点、総重量で約8.0kgである。遺物の内容は、古代（平安時代）の土師器、須恵器、中世の土師質土器、珠洲、近世の肥前、越前、唐津、時期不明の木製品である。このうち、図化が可能な55点を図示して掲載し、時代ごとに述べる。個別の詳細な情報については遺物観察表（附表2、3）に掲載しているので参照されたい。

土器・陶磁器類の器種分類・年代観については、『新潟県の考古学』〔新潟県考古学会1999〕、『箕輪遺跡II』〔新潟県教委ほか2015〕、『中世須恵器の研究』〔吉岡1994〕、『肥前陶磁』〔大橋1989〕など、既存の編年観に準拠した。

2 遺物各説

1) 古代

P41から須恵器の無台杯の口縁部から底部（1）、P89から須恵器の楕の口縁部（2）、SK10の床面付近から土師器の鍋の口縁部（5）、SK106から須恵器の甕の胴部（7）、SD28の下層から須恵器の有台杯の口縁部から底部（12）が出土した。また、包含層のⅢ層から土師器の無台椀の口縁部（32～36）、底部（37～39）、鍋の口縁部（40）、須恵器の甕の胴部（43）、開渠掘削時に須恵器の杯蓋（42）が出土した。

1と2は内外面ともにロクロナデが施され、1の底面にはヘラ切り後にナデが施されている。いずれも、胎土がきめ細かく白色粒を含み、器面の凹凸が顕著で器壁が薄いため、佐渡小泊窯産と考えられる。5は口縁部が外傾し、口縁端部を内屈させる。調整は内外面ともに摩耗が著しく不明である。7は外面に格子状の叩き目、内面に同心円の当て具痕が見られる。12はSD28の8層から出土した。貼り付け高台を持ち、体部が直線的に外傾して口縁部に至り、口縁端部はやや丸みを帯びる。内外面ともロクロナデが施されている。32の底面に不鮮明であるが回転糸切り痕が見られる。調整は内外面ともに摩耗が著しく不明である。34～39の調整は内外面ともに摩耗が著しく不明である。32～36はやや内寄気味か直線的に外傾して口縁部に至る。40は口縁端部に平坦面を持ち内側に摘み上げられている。調整は内外面ともに摩耗が著しく不明である。42は外面天井部が平坦で屈曲して口縁部に至るものである。内外面ともにロクロナデが施され、外面天井部にはヘラケズリが見られる。43は外面に格子状の叩き目、内面に同心円の当て具痕が見られる。

遺構や包含層から出土した古代の遺物は、器形等の特徴から箕輪遺跡4～5期に比定する。

2) 中世

P89から珠洲の壺の胴部（3）、SK99から珠洲の壺の胴部（6）、SK119から珠洲の甕の胴部（8）、SK128から土師質土器の皿の口縁部から底部（9）、SD1から珠洲の甕の胴部（10）と胴部から底部（11）、SD28の上層から珠洲の甕の胴部（13）、SD55から珠洲の甕の口縁部（14）、SE2から珠洲の甕の胴部（15）

が出土した。また、包含層のII層から珠洲の甕の胴部(44)、III層から土師質土器の皿(41)、珠洲の甕の胴部(45～48)と片口鉢の口縁部から胴部(49)が出土した。

3は外面の肩部に波状文が施され、胴部には平行叩き目が見られる。内面の胴部上はロクロナデが施され、胴部下には無文の当て具痕が見られる。6は内外面ともにロクロナデが施され、外面には縦位に波状文が見られる。8は外面に平行叩き目、内面に無文の当て具痕が見られる。9は直径9cm、器高1.5cmの小型の皿である。調整は内外面ともに摩耗が著しいため不明である。10は外面に平行叩き目、内面に無文の当て具痕が見られる。11は外面に平行叩き目が見られ、底部は砂底である。13は検出面付近の上層で出土したもので、外面に平行叩き目、内面は無文の当て具痕が見られる。14は口縁部が外傾し、端部は丸みを帯びる。口縁部は内外面ともにロクロナデが施され、胴部は外面に平行叩き目、内面に無文の当て具痕が見られる。15は外面に平行叩き目、内面に無文の当て具痕が見られ、一部にヘラナデが施されている。41は直径9cm、器高1.3cmの小型の皿である。調整は内外面ともに摩耗が著しいため不明である。44～48は外面に平行叩き目、内面には無文の当て具痕が見られる。45は内面にススが付着している。49は内外面ともにロクロナデが施され、胴部はやや内寄し口縁部に至り、口縁端部は概ね水平である。

3) 近世

P120から唐津の碗の口縁部(4)、SE130から井戸側の板材(16～31)が出土した。また、包含層のIII層から越前の播鉢の底部(50)、肥前の皿の底部(52、53)、肥前の蓋(54、55)、II層から肥前の皿の底部(51)が出土した。

4はロクロ成形で外面の口縁部と内面全体に鉄釉が施されており、18世紀代のものと考えられる。16～31は井戸側の板材であり、16枚とも柾目取りされ、長さ65cm前後、厚み2cmとほぼ同じである。幅は5～18cmと様々あり、5cmのものが2枚、10cm前後のものが6枚、15cm前後のものが7枚、18cmのものが1枚である。井戸側の簞は竹製で桶の上・中・下の3段に使用されており、ねじり編みで編まれている。簞は3段が確認できたが、その他にも簞と考えられる痕跡が確認できたため、井戸側を造る際の痕跡か再利用ではないかと考えられる。板材上部の側面の1～2か所を木釘で留めており、木釘は長さ4cm、幅0.5cmの方形ないし長方形で、両先端とも尖らせている。50は外面にロクロナデが施され、内面の御目は1単位の幅は3cmで、10条認められる。51～53は削り出しの高台をもち、見込部に蛇の目釉剥ぎが見られる。54、55は肥前の蓋で、口縁部が内傾している。

VI　まとめ

1　調査成果

柱穴・ピット・井戸・溝など古代から近世にかけて計 116 基の遺構を確認した。調査区が狭小であり、遺構から出土した遺物も少なく、遺構の変遷など遺跡の全体像はつかめなかった。しかし、周辺における遺跡の存在を想定できる貴重な資料を得ることができた。

SD1 と SD28 の下層の覆土が類似していることから、SD1 と SD28 は古代に造られたと考えるが、断面観察により両者は後に掘り直していることを確認した。SD55 は掘り直した痕跡を確認できなかつたが、底付近の覆土が類似していることから、SD1、SD28 と同時期に造られた溝と考える。時期については、SD28 は下層から須恵器の有台杯が出土し、器形等の特徴から箕輪遺跡 4～5 期に比定できる。4 期は新潟県内の編年研究〔春日 1999〕による VI 期と併行するが、V 期が 8 世紀末まで上がる可能性は低く、VI 期は 9 世紀第 3～4 四半期を中心とする時期に位置付けられている〔新潟県教委ほか 2015〕。さらに、4 期（新）はその後半段階のため、9 世紀後半から 10 世紀初頭と捉えておきたい。また、SD28 の掘り直しに相当する層から、13 世紀中頃の珠洲の甕の破片が出土しているため、長期間にわたり継続的に利用されていたことが窺える。本遺跡から北東へ約 1.2 km に 13 世紀後半から 14 世紀が主体の集落である東原町遺跡があり、溝により居住域と生産域が区画されていることが明らかになっている。本遺跡でも SD1 と SD28、SD125 と SD55 といった主軸を揃えた溝やそれに直交する溝があることから、区画溝として機能していた可能性がある。

SE130 には結桶と考えられる井戸側が設けられていた。遺存状況が比較的によく、当時の井戸の構造を理解するのに貴重な資料である。沖積低地では、井戸の内部に土砂が崩落することを防ぐために井戸側が必要となる。中世では方形木組と曲物桶が用いられることがあるが、曲物桶は側板の板幅が井戸側の高さになるため、深い井戸に据えるためには幅広い良好な板材が必要となる。一方、結桶は井戸側の高さに板の長さを合わせることができることから、深いところまで補強でき、悪条件下でも井戸を掘って水を確保できたと考えられる。この井戸の時期については、陶磁器の小片しか出土していないため詳細は不明である。しかし、結物が日本国内で本格的に製作されたのは 15 世紀以降で、17～19 世紀までが質量ともに結物の最盛期となる時期であるとされている。また、包含層などから出土した陶磁器は 18 世紀頃のものが多いことから、SE130 は 18 世紀頃を中心とした近世の井戸と考える。

2　おわりに

藤元町西遺跡から西に約 100m のところには一般県道黒部柏崎線が南西から北東へ通っている。この路線は古くから道として使用されており、この周辺に集落が営まれていた。しかし、この一帯は鮒石川の河口域で勾配がほとんどなく、鮒石川の蛇行が著しい。さらに砂丘地に河口があるため海に排出されにくい環境にあり、流域では洪水がたびたび発生していたことが窺える。このような場所で、古代から近世にかけての集落遺跡の存在が明らかになり、柏崎市の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができた。

引用・参考文献

- 石村真一 1991「竹植の技術と文化」『竹と民具』雄山閣出版
- 宇野隆夫 1982「井戸考」『史林』第65巻 史学研究会
- 荻野正博 1986「第6章 第2節 莊園と国衙領」『新潟県史（通史編1 原始・古代）』
- 大橋康二 1989『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
- 柏崎市教育委員会 1991『小堀石』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第15集
- 柏崎市教育委員会 1996『田塚山遺跡群』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第21集
- 柏崎市教育委員会 1996『柏崎市の遺跡V』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第22集
- 柏崎市教育委員会 1998『柏崎市の遺跡VII』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第29集
- 柏崎市教育委員会 1999『角田』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第32集
- 柏崎市教育委員会 2000『柏崎市の遺跡IX』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第33集
- 柏崎市教育委員会 2001『柏崎町』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第38集
- 柏崎市教育委員会 2003『柏崎市の遺跡XII』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第41集
- 柏崎市教育委員会 2011『柏崎市の遺跡X X』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第65集
- 柏崎市教育委員会 2013『下境井』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第73集
- 柏崎市教育委員会 2014『柏崎市の遺跡23』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第75集
- 柏崎市教育委員会 2015『上原』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第78集
- 柏崎市教育委員会 2016『丘江』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第81集
- 柏崎市教育委員会 2016『柏崎市の遺跡25』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第83集
- 柏崎市教育委員会 2017『中田下川原』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第88集
- 柏崎市教育委員会 2017『角田III』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第90集
- 柏崎市教育委員会 2019『柏崎市の遺跡29』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第96集
- 柏崎市史市編さん委員会 1987『柏崎市史 上巻』
- 柏崎市史市編さん委員会 1987『柏崎市史資料集 考古篇 I』考古資料（図・拓本・説明）
- 金子拓男 1990「第6章 第3節 三嶋郡の分立」『柏崎市史 上巻』市史編さん室
- 春日真実 1996「越後・佐渡の様相」『北陸の9世紀代の土器様相』（第77回北陸古代土器研究会資料）
- 北陸古代土器研究会
- 春日真実 1997「越後における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第7号 北陸土器研究会
- 春日真実 1999「第4章2 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 春日真実 2010「貞觀5年の地震痕跡再考 -百瀬正恒氏からの批判に対する反論」『三面川流域の考古学』第8号 奥三面を考える会
- 春日真実 2015「遺跡の位置と概要」「まとめ 1 土器陶磁器」『箕輪遺跡II』新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第254集
- 坂井秀弥 1995「越後の道・町・村 中世から近世へ」『中世の風景を読む』第4巻 新人物往来社
- 坂井秀弥 1983「歴史的背景と栗原遺跡」『栗原遺跡第一6次発掘調査概報一』新潟県教育委員会
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1996『埋蔵文化財愛知 no. 44』
- 新潟県 1986『新潟県史（通史編1 原始・古代）』
- 新潟県考古学会 1999『新潟県の考古学』古志書院

新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 1999『和泉A遺跡』新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第93集
新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2005『東原町遺跡 下沖北遺跡II』

新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第140集

新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2012『山崎遺跡』新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第241集

新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2015『宝田遺跡』新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第252集

新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2015『箕輪遺跡II』新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第254集

新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2015『宝田遺跡II』新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第264集

新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2018『山崎遺跡II』新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第265集

新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2018『宝田遺跡III』新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第273集

新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2018『丘江遺跡III』新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第274集

新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2018『丘江遺跡I』新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第275集

新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2018『丘江遺跡II』新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第276集

新沢佳大 1990「第1章 幕藩体制社会の支配」『柏崎市史 中巻』市史編さん室

吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

米沢康 1980「大宝二年の越中国四郡分割をめぐって」『信濃』第32卷6号 信濃史学会

村山教二 1990「第1章 中世における柏崎市域」『柏崎市史 上巻』市史編さん室

附表 1 藤元町西通り 温構観察表

粘性・しまり ○井戸に無い □強い ○やや強い ▲普通 △やや弱い ◇弱い ×無

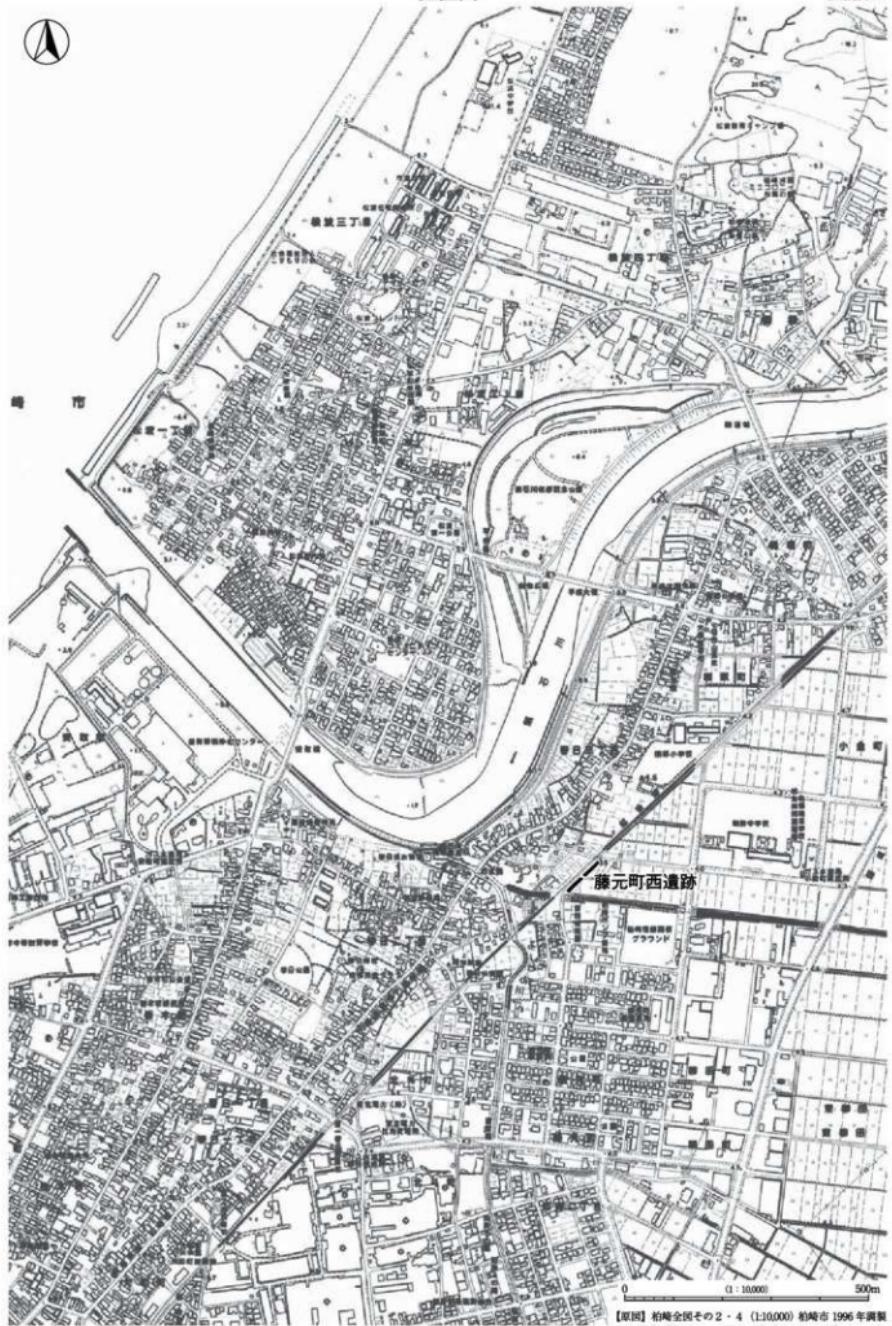
表2 聚元町西遺跡出土遺物觀察表

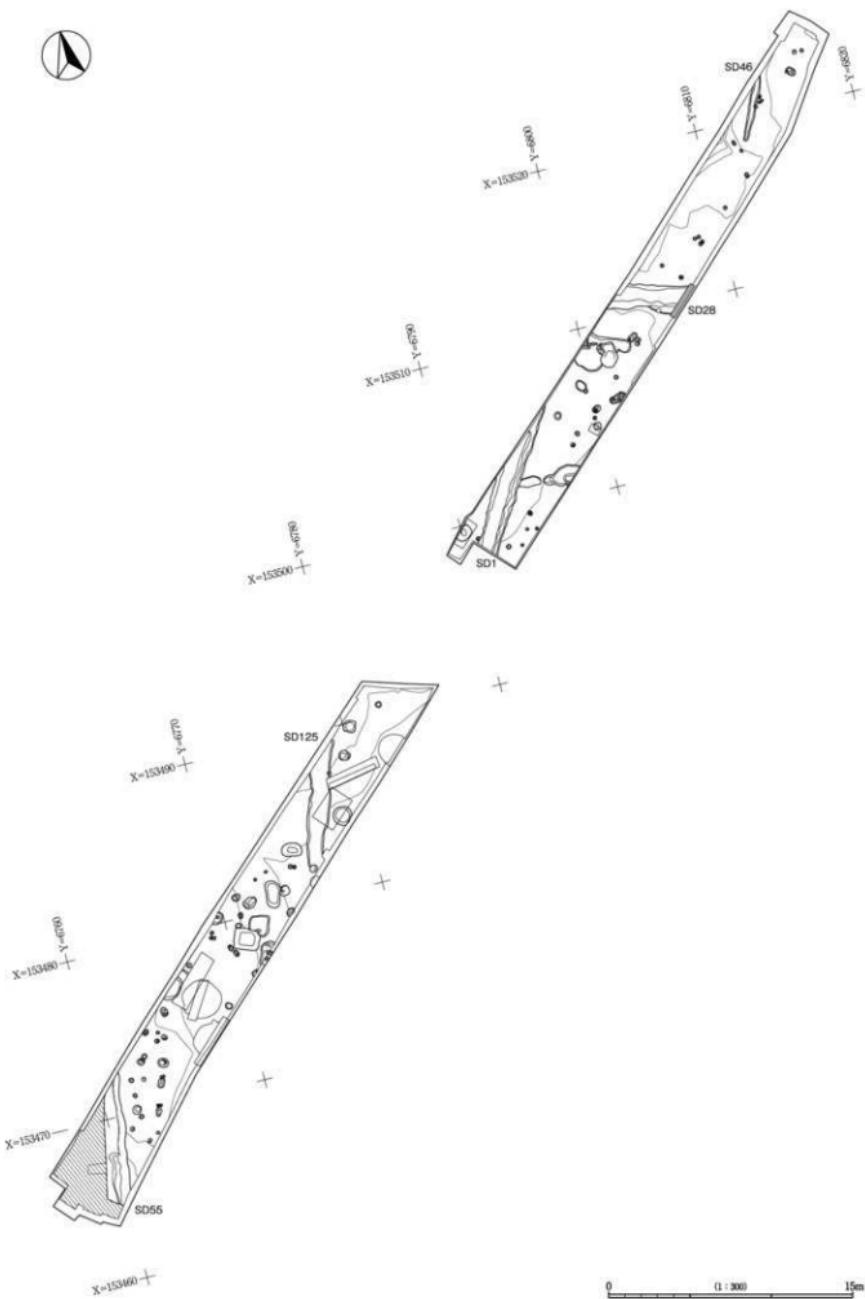
附表3 藤元町西遺跡出土遺物觀察表

番号	場所	標高(m)	風向	風速(m/s)	雨量(mm)		雲状	気温(°C)	湿度(%)	風速(m/s)	風向	雲状	気温(°C)	湿度(%)	風速(m/s)	風向	雲状	気温(°C)	湿度(%)
					日	夜													
1	P 81 A 5518C1	89	北	0.0	—	—	晴	12.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
2	P 89 B 2713	2	西北	0.0	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
3	P 89 B 2713	1	北	0.0	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
4	P 5010 B 3223	3	北	0.0	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
5	S 5K 10 A 5423	5	北	0.0	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
6	S 5K 99 B 3467	8	北	0.0	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
7	S 5K 106 B 3972	1	西北	0.0	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
8	S 5K 119 B 3922	3	北	0.0	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
9	S 5K 128 B 3816	3	北	0.0	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
10	S 501 A 5023	1	北	0.0	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
11	S 501 A 5023	1	北	0.0	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
12	SD 28 A 6123	8	西北	0.0	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
13	SD 30 A 6123-2324	1	北	0.0	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
14	SD 50 A 6123	1	北	0.0	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
15	S 56 2 A 501	2	北	0.0	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
22	A 5D 30	1	北	0.0	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
23	A 4E 30	1	北	0.0	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
34	A 503	1	北	0.0	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
35	A 5D 30	1	北	0.0	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
36	A 2913	1	北	0.0	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
37	A 5D 30	1	北	0.0	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
38	A 5D 30	1	北	0.0	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
39	A 5D 30	1	北	0.0	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
40	A 5C21	1	北	0.0	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
41	B 1G	3	北	0.0	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
42	雨量	264	—	—	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
43	B 1G5	—	—	—	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
44	B 2E	—	—	—	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
45	A 5D	—	—	—	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
46	B 2F	—	—	—	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
47	B 3F9	—	—	—	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
48	B 2F	—	—	—	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
49	A 5D	—	—	—	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
50	B 1G	—	—	—	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
51	B 1G	—	—	—	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
52	B 4G	—	—	—	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
53	B 2G1	—	—	—	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
54	B 1G	—	—	—	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77
55	B 1G	—	—	—	—	—	晴	13.0	81	—	—	晴	10.0	77	—	—	晴	10.0	77

位置図

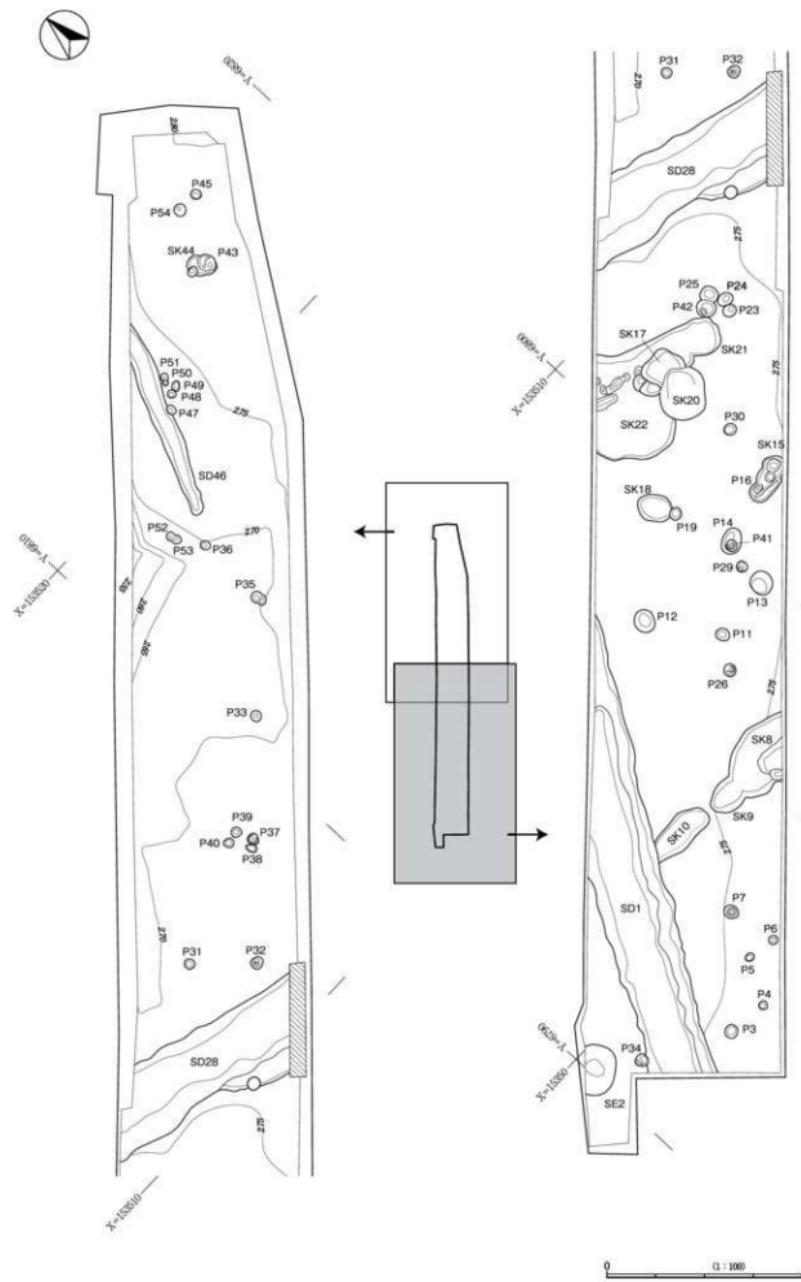
図版 1





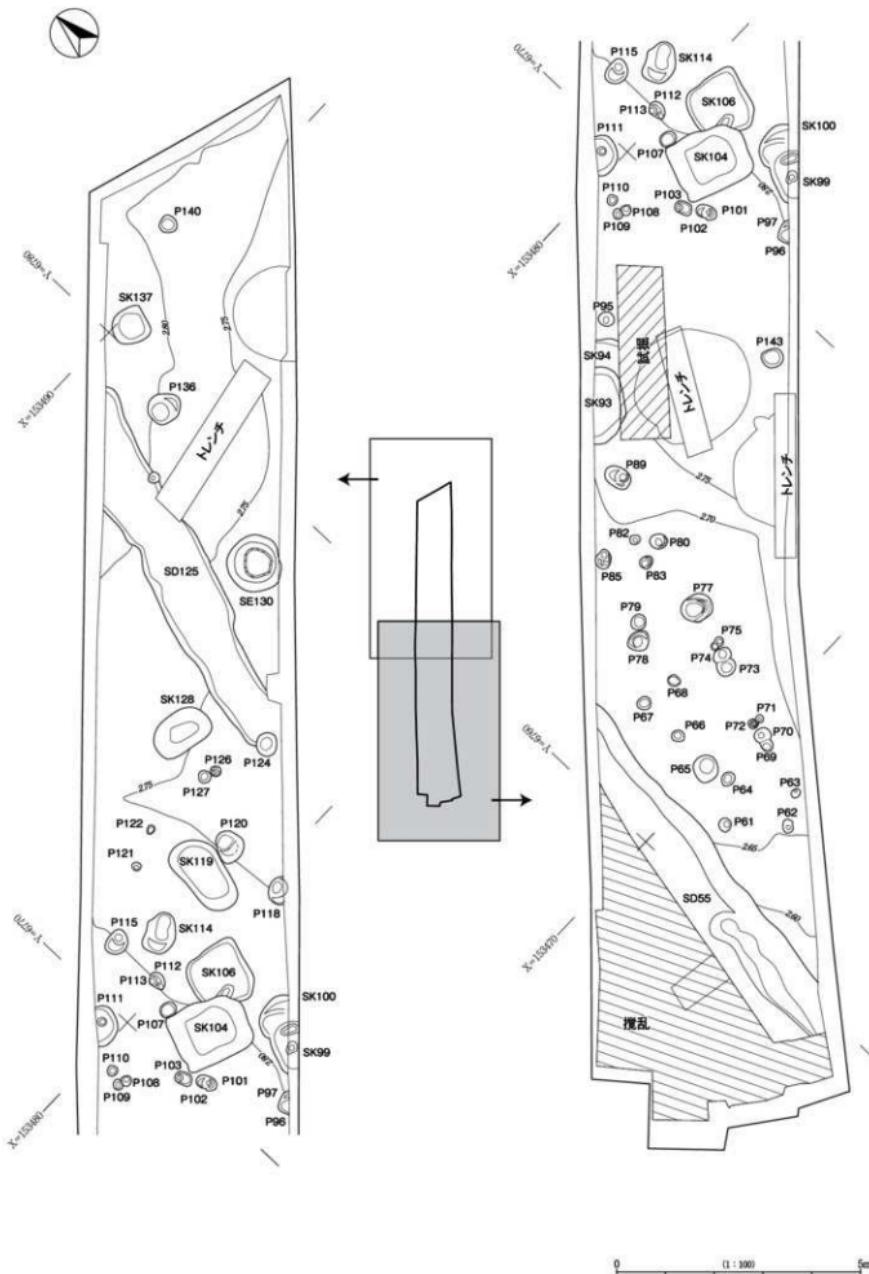
分割図 1

図版 3



図版 4

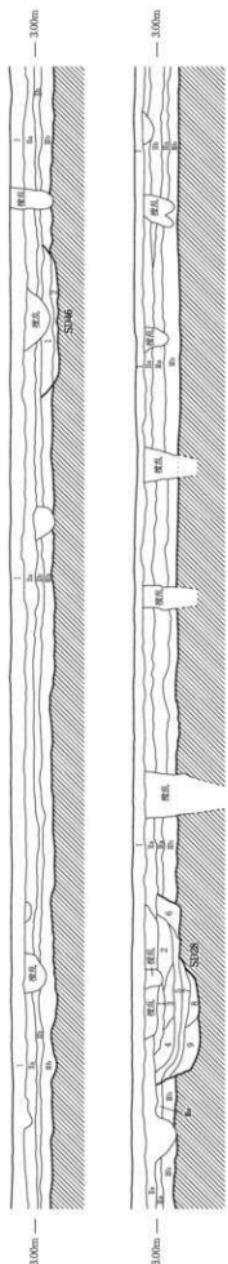
分割図 2



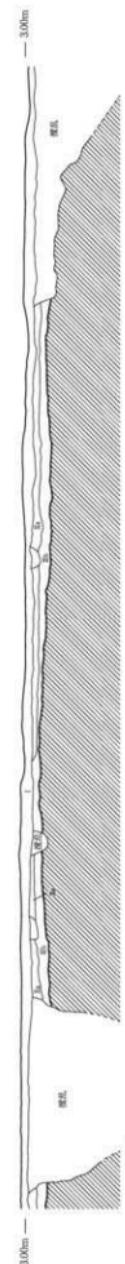
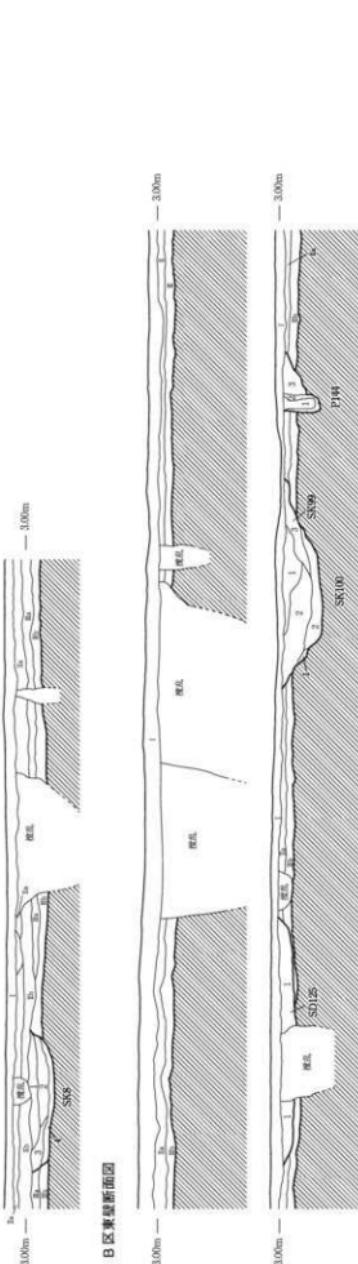
調査区東壁断面図

図版 5

A 区東壁断面図



B 区東壁断面図

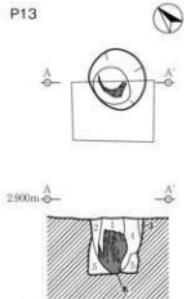


- < 基本層序 >
- I 表土、砂質、現代の耕作土。
 - In に-5y 黒褐色土 (7.5YR6/3)
 - Tb に-2yv 黑褐色土 (7.5YR5/3)
 - IIIa 黑褐色土 (7.5YR5/2)
 - IIIb 黑褐色土 (7.5YR5/1)

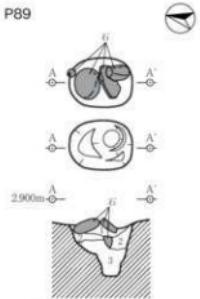
0 1:600
スケール

図版 6

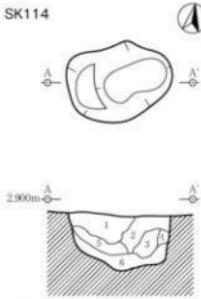
遺構個別図 1



- < P13 >
1 開灰色土(7.5YR4/1)
粘性あり,しまりあり。
φ1mm炭化物粒子を少量含む。
2 開灰色土(7.5YR4/1)
粘性あり,しまりあり。
φ1~2cm地山ブロックを多量に含む。
3 開灰色土(7.5YR6/1)
粘性あり,しまりあり,地山混在。
4 開灰色土(7.5YR6/1)
粘性あり,しまりあり,地山混在。
5 開灰色土(7.5YR6/1)
粘性強い,しまり強い,地山混在。

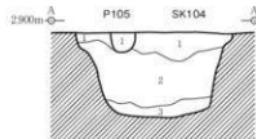


- < P89 >
1 黒褐色土(7.5YR5/1)
粘性あり,しまりあり。
φ1mm炭化物を微量含む。
2 開灰色土(7.5YR4/1)
粘性あり,しまりあり。
φ2~3cm地山ブロックを多量に含む。



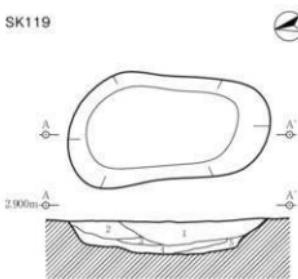
- < SK114 >
1 開灰色土(7.5YR5/1)
粘性あり,しまりあり。
φ2~3cm地山ブロックを多量に含む。
2 開灰色土(7.5YR5/1)
粘性あり,しまりあり,φ1mm炭化物を微量含む。
3 開灰色土(7.5YR4/1)
粘性あり,しまりあり,φ1~2cm地山ブロックを多量に含む。
4 開灰色土(7.5YR5/1)
粘性あり,しまりあり,地山混在。
5 開灰色土(7.5YR5/1)
粘性あり,しまりあり,φ1mm炭化物を含む。
6 淡白色土(7.5YR8/1)
粘性強い,しまり強い,φ5~10cm地山ブロックを多量に含む。

SK104, P105, SK106, P107



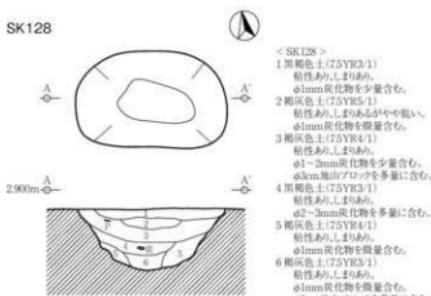
- < SK104 >
1 開灰色土(7.5YR4/1)
粘性あり,しまりあり,φ1mm炭化物を少量含む, φ5~8cm地山ブロックを少量含む。
2 開灰色土(7.5YR4/1)
粘性あり,しまりあり,φ10cm地山ブロックを多量に含む。
3 開灰色土(7.5YR5/1)
粘性あり,しまりあり,地山混在。
< P105 >
1 開灰色土(7.5YR4/1)
粘性あり,しまりあり,φ1mm炭化物を少量含む, φ1~3cm地山ブロックを少量含む。
< SK106 >
1 開灰色土(7.5YR4/1)
粘性あり,しまりあり,φ2cm地山ブロックを少量含む。
2 開灰色土(7.5YR4/1)
粘性あり,しまりあり,φ1mm炭化物を少量含む, φ1~2cm地山ブロックを少量含む。
3 開灰色土(7.5YR4/1)
粘性あり,しまりあり,地山混在。

SK119



- < SK119 >
1 黒褐色土(7.5YR3/1)
粘性あり,しまりあり。
2 開灰色土(7.5YR4/1)
粘性あり,しまりあり,φ5~6cm地山ブロックを多量に含む。
3 開灰色土(7.5YR4/1)
粘性あり,しまりあり,φ1~2cm地山ブロックを多量に含む。
4 開灰色土(7.5YR3/1)
粘性あり,しまりあり,φ1mm炭化物を少量含む。
5 黑褐色土(7.5YR3/1)
粘性あり,しまりあり,φ1mm炭化物を微量含む。
φ1~2cm地山ブロックを多量に含む。

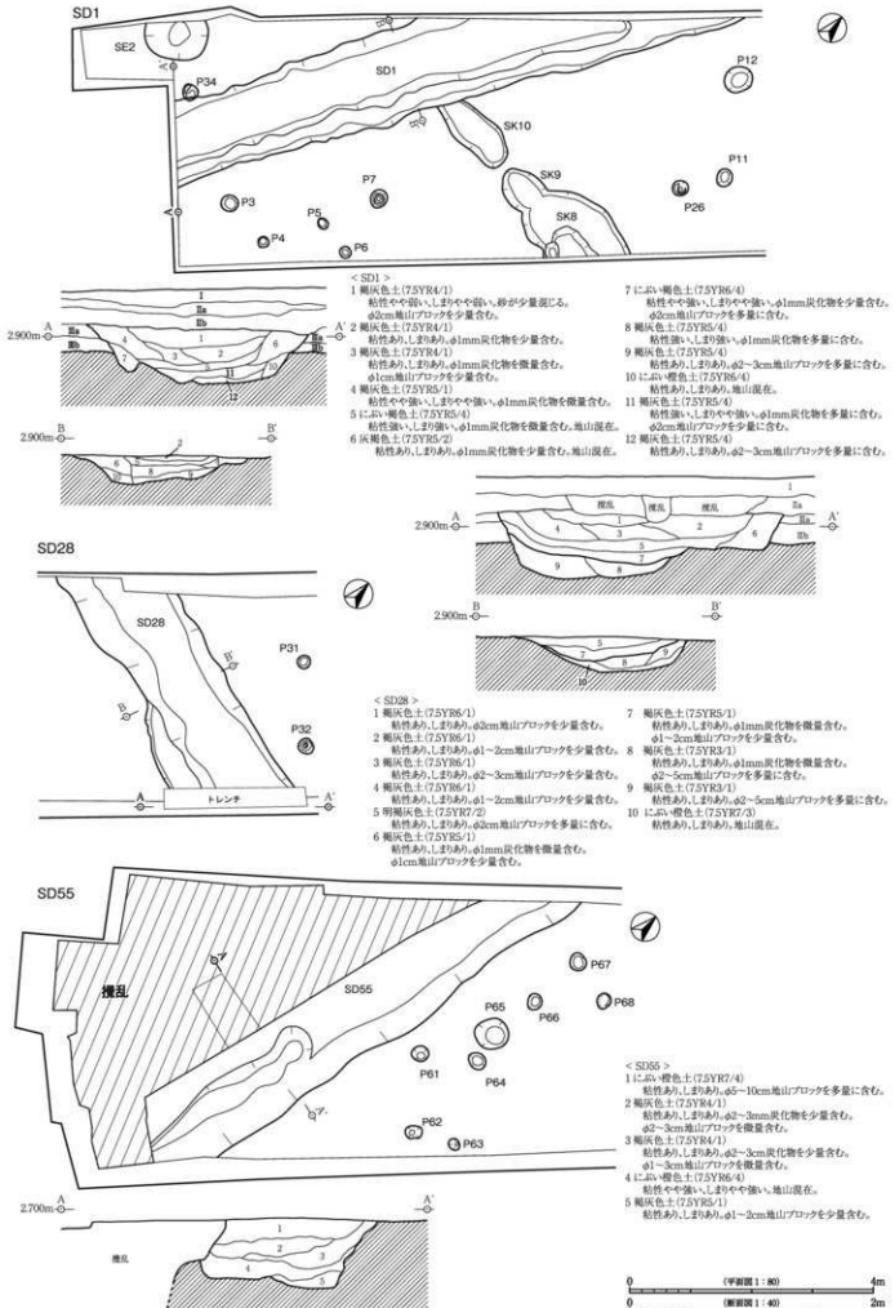
SK128



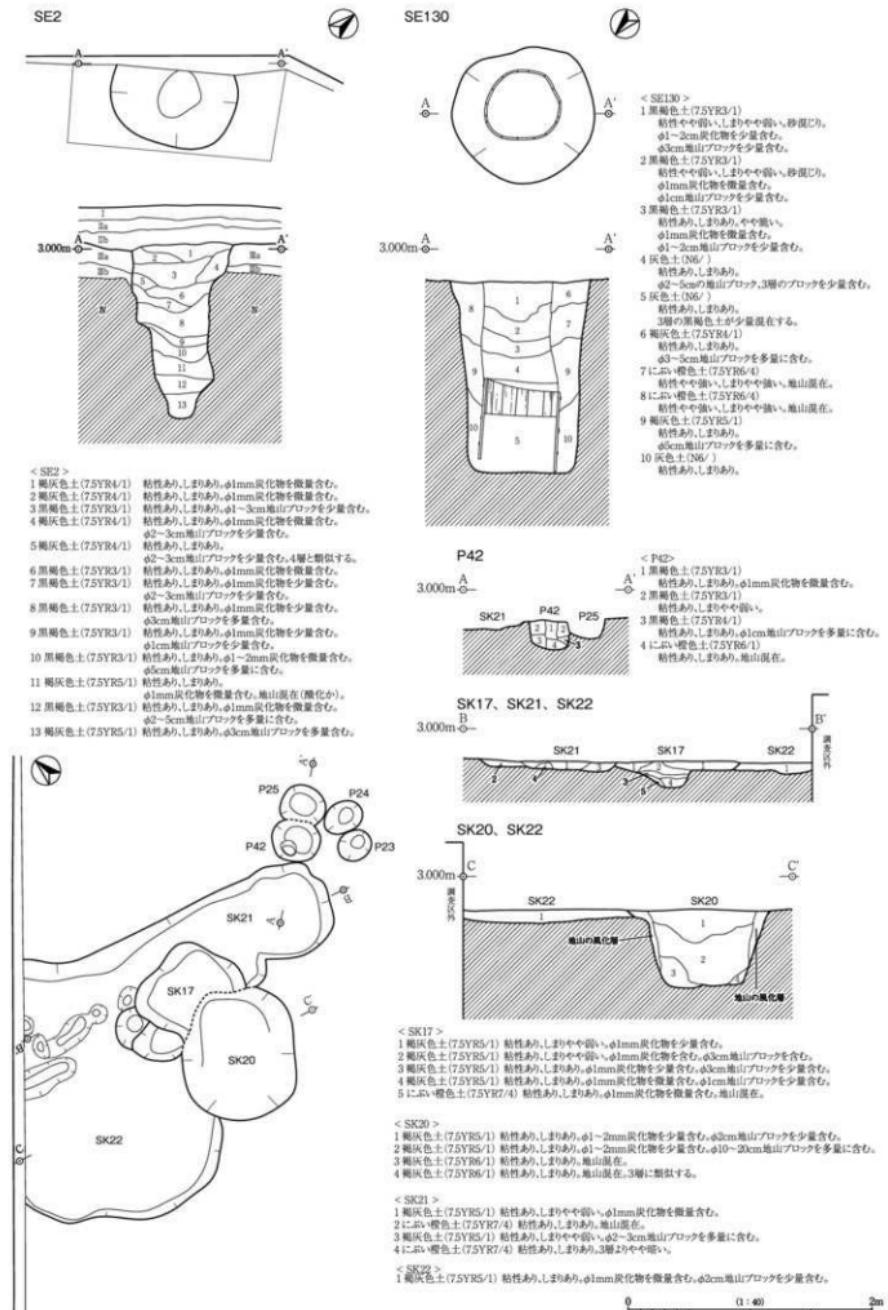
- < SK128 >
1 黑褐色土(7.5YR3/1)
粘性あり,しまりあり。
φ1mm炭化物を微量含む。
2 開灰色土(7.5YR4/1)
粘性あり,しまりあり,φ1mm炭化物を微量含む。
3 黑褐色土(7.5YR3/1)
粘性あり,しまりあり。
φ1~2mm炭化物を微量含む。
4 開灰色土(7.5YR3/1)
粘性あり,しまりあり。
φ2~3cm地山ブロックを多量に含む。
5 黑褐色土(7.5YR3/1)
粘性あり,しまりあり。
φ1mm炭化物を微量含む。
6 黑褐色土(7.5YR3/1)
粘性あり,しまりあり。
φ1mm炭化物を微量含む。
φ5cm地山ブロックを多量に含む。

遺構個別図 2

図版 7

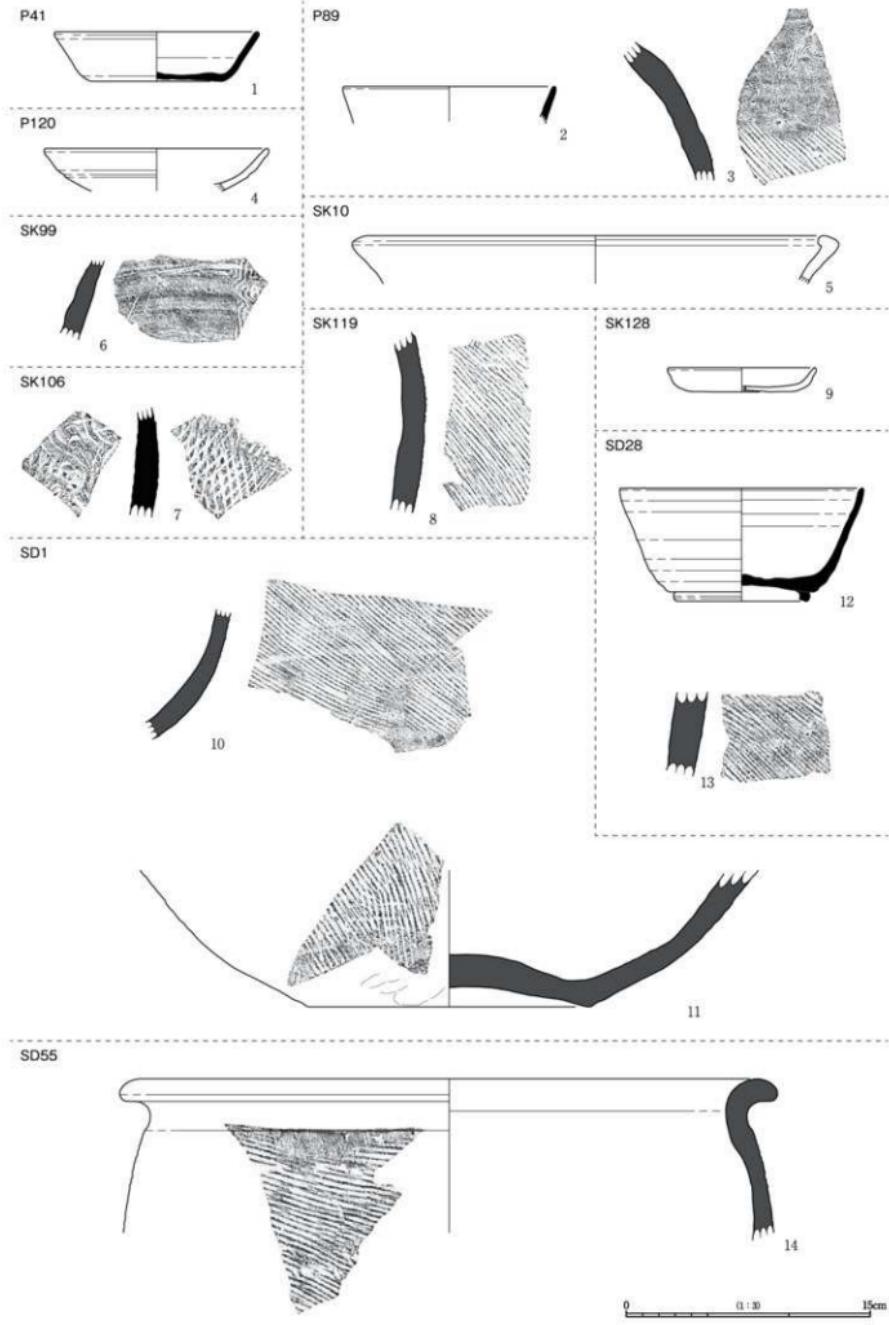


図版 8



出土遺物 1

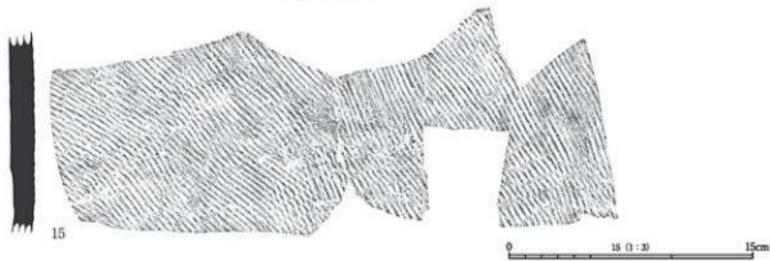
図版 9



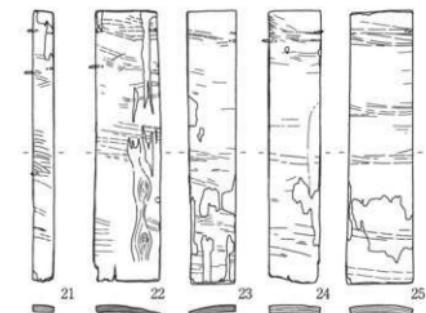
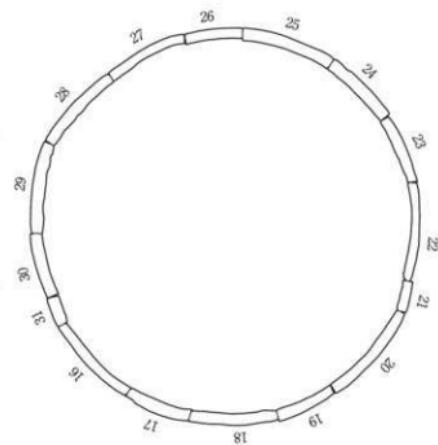
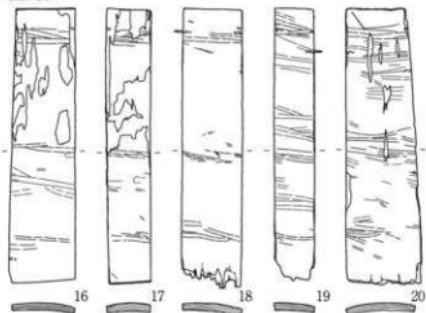
図版 10

出土遺物 2

SE2



SE130

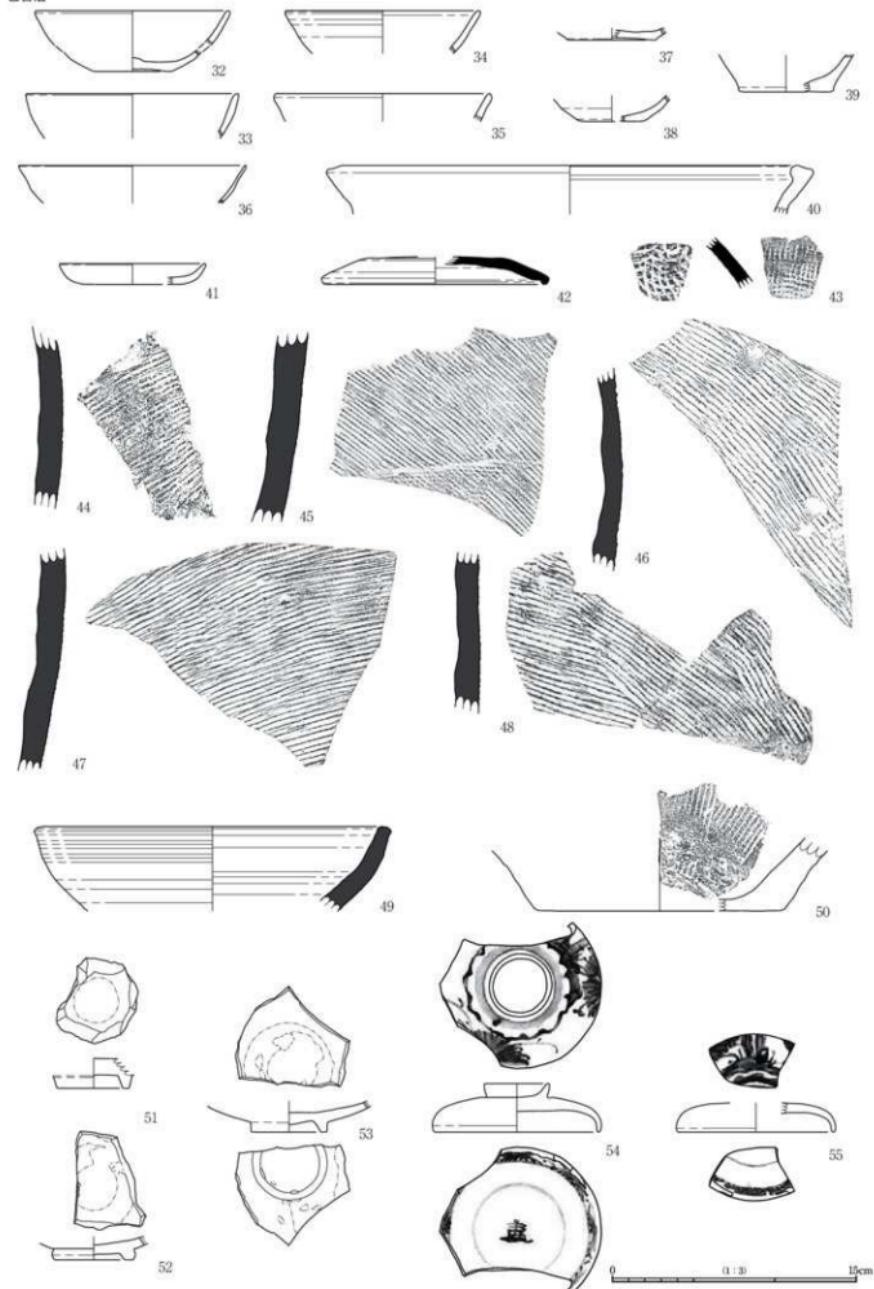


0 井戸壁上面・正面 (1 : 8) 40cm
0 その他 (1 : 12) 60cm

出土遺物 3

図版 11

包含層



0 1:20 15cm



調査区近景（東から 鶴石川と日本海方向）



調査区全景（上空から 上が南東）



A 区近景（上空から 上が南東）



B 区近景（上空から 上が南東）

遺構 1

図版 13



P13 土層断面（南西から）



P13 完掘（南西から）



P89 検出状況（西から）



P89 土層断面（西から）



P89 完掘（西から）



P25 土層断面（南東から）



P42 土層断面（南東から）



P25・42 完掘（南東から）

図版 14

遺構 2



P41 土層断面（北西から）



P41 遺物出土状況（南東から）



SK17・21・22 土層断面（北東から）



SK20 土層断面（南西から）



SK17・20・21・22 完掘（南から）



SK104・106 土層断面（東から）



SK104 土層断面（東から）



SK104・106 完掘（東から）

遺構 3

図版 15



SK114 土層断面（南から）



SK114 完掘 1（北西から）



SK114 完掘 2（南東から）



SK119 土層断面（西から）



SK119 完掘（東から）



SK128 土層断面（南から）



SK128 完掘（南から）



作業風景（南から）

図版 16

遺構 4



SD1 土層断面 1 (南西から)



SD1 調査区南壁土層断面 (北東から)



SD1 完掘 (南から)



SD28 調査区東壁土層断面 (北西から)



SD28 土層断面 (東から)



SD28 完掘 (西から)



SD55 土層断面 (南から)



SD55 完掘 (北から)

遺構 5

図版 17



SE2 土層断面（南東から）



SE2 完掘（南東から）



SE130 土層断面 1（北西から）



SE130 井戸側検出状況 1（西から）



SE130 土層断面 2（北西から）



SE130 井戸側検出状況 2（北西から）



SE130 井戸側内土層断面（北西から）



SE130 完掘（北西から）

図版 18



出土遺物 1

出土遺物 2

図版 19

SE2



15

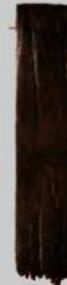
SE130



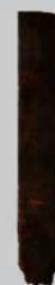
16



17



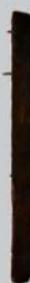
18



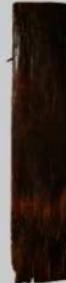
19



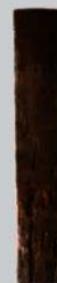
20



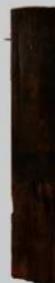
21



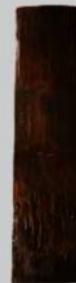
22



23



24



25



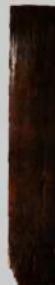
26



27



28



29



30 31

包含層



報 告 書 抄 錄

ふりがな	ふじもとちょうにし							
書名	藤元町西							
副書名	新潟県柏崎市 藤元町西遺跡発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第99集							
編著者名	中島 義人（柏崎市教育委員会）、丹 俊詞、板谷 隆弘（藤村クレスト株式会社）							
編集機関	柏崎市教育委員会（担当：博物館）							
発行者	柏崎市教育委員会							
所在地	番号 945-8511 新潟県柏崎市中央町5番50号 TEL 0257-23-5111							
発行年月日	西暦 2020年（令和2年）7月10日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間 西暦年月日	調査面積 m ²	調査原因	
ふじもとちょうにし 藤元町西遺跡	にいがたけん かしわざきし 新潟県 柏崎市 ふじもとちょう 藤元町 157-1 他	15205	1037	37度 23分 00秒	138度 34分 36秒	20190614 ～ 20190729	320	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
藤元町西遺跡	集落	古代（平安時代） 中世 近世	溝・土坑・ピット・井戸			土師器・須恵器・珠洲 ・陶磁器・井戸側		
要約	<p>古代から近世の土師器・須恵器・珠洲・陶磁器などの遺物が出土し、ピット88基、溝5条、土坑21基、井戸2基などの遺構を検出した。SD1とSD28、SD125とSD55といった主軸を揃えた溝やそれに直交する溝があることから、区画溝として機能していた可能性が考えられる。また、SE130からは井戸側を検出した。</p> <p>古代から近世にかけての遺構・遺物が確認できたが、この一帯は鰐石川の河口域で勾配がほとんどなく、鰐石川の蛇行が著しい。さらに砂丘地に河口があるため海に排出されにくい環境にあり、流域では洪水がたびたび発生していたことが窺える。この様な場所に集落遺跡の存在を想定できる貴重な資料を得ることができた。</p>							

※ 緯度・経度は世界測地系に基づく。

柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第99集

藤元町西

— 新潟県柏崎市 藤元町西遺跡発掘調査報告書 —

令和2年（2020年）7月10日 印刷

令和2年（2020年）7月10日 発行

発行 柏崎市教育委員会

〒945-8511 新潟県柏崎市中央町5番50号

印刷 有限会社文盛堂印刷所

〒945-1345 新潟県柏崎市下田尻1306番地4

